

## 最近の症例から (5) ——腺様嚢胞癌——

井口光世, 古澤清文

松本歯科大学 口腔外科学第2講座 (主任 山岡 稔 教授)

守屋久見子

国立松本病院 放射線科 (主任 守屋久見子 医長)

患者: 75歳, 男性

初診: 昭和63年9月13日

主訴: 口蓋部の腫脹

家族歴: 特記事項なし

既往歴: 昭和61年3月, 自然気胸にて国立松本病院外科で全身麻酔下に開胸術を施行される。その際, 右側下肺野に2個, 左側上肺野に1個, 左側下肺野に1個各々直径約10 mmの腫瘤を認め, その腫瘤を病理組織学検査に供したところ腺様嚢胞癌と診断された。さらに, 昭和63年8月に撮影した胸部X線写真でも小指頭大で比較的境界明瞭な不透過像を数個認めた(写真1)。このため, 肺への転移癌を疑い全身的に精査したが原発巣は特定できなかった。さらに同年4月, 心筋梗塞にて約1ヶ月の入院加療を受け, 退院後もニトログリセリン製剤の投与をされている。

現病歴: 昭和62年3月頃より, 右側硬口蓋に米粒大の腫瘤を認めたが放置していた。その後, 次第に増大傾向を認めたため当科を受診した。

現症

全身所見: 体格中等度, 栄養状態良好で他に特記すべき事項なし。

局所所見: 顔貌は左右対称性。顎下リンパ節は両側に小豆大のものを各1個触知するも, 可動性で圧痛は認められなかった。口腔内所見としては, 上顎歯牙は全て欠如し, 右側第2小白歯部から上顎結節にかけて歯槽と硬口蓋部から軟口蓋部に及

ぶ, 軽度の発赤と暗赤紫色を呈する比較的境界明瞭な類円形40×30 mmの広基性結節状腫瘤を認めた。腫瘤は弾性軟であったがその中央部は瘻孔の形成を認め窮めて柔軟で, 一部壊死組織の存在を疑わしめた(写真2)。

臨床検査所見: 特記すべき所見は認められなかった(表1)。

臨床診断名: 腺様嚢胞癌

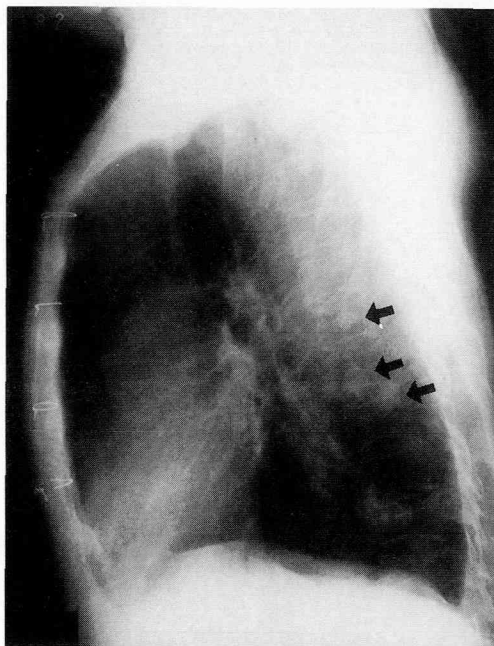


写真1

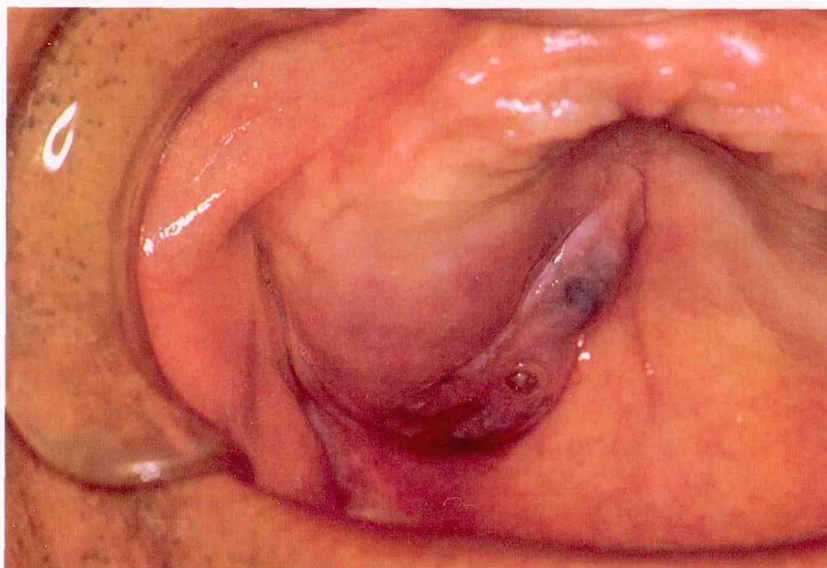


写真 2

表 1 : 初診時臨床検査成績

(血液一般)	
白血球数	$40 \times 10^2 / \mu l$
赤血球数	$406 \times 10^4 / \mu l$
血色素量	13.6 g/dl
ヘマトクリット値	40.8%
血小板数	$19.7 \times 10^4 / \mu l$
血沈値	9 mm/hr
白血球分画	
Stab.	2 %
Seg.	48%
Eo.	6 %
Ba.	0 %
Mo.	7 %
Ly.	36%
A-Ly.	1 %